

3 大正・昭和初期のガラス瓶（サクラビール）

- ガラス瓶** 平成24年度の第107次調査において、遺構外表土の出土遺物ではあるが、「サクラビール」と浮き出し文字のある特徴的なガラス瓶が出土した。
- 特徴** 瓶の特徴を観察すると、高さ28.5cm、口径2.5cm、肩幅8.3cm、底面径7.0cmであり、底部の一部が削られ、全体的に引っ掻き傷があるほかは完形であり、いかり肩の所謂「大瓶サイズ」のビール瓶である。瓶色は、よく見られる茶色ではなく緑色であり、肩部に右読みで「登録商標」の浮き出し文字とともに桜花のマークが陽刻され、胴部下端には「SAKURA BEER」と右読みで「サクラビール」の浮き出し文字、底面には「TGC」の浮き出し文字がある。ラベルは残存していない（写真第23図版）。このサクラビールとは、いつどこで製造されたビールなのか。
- サクラビール** 今から約100年前の明治45年(1912)、福岡県門司市(現北九州市門司区)の山田弥八郎らが、当時隆盛を誇っていた神戸の鈴木商店の援助を受け、「帝国麦酒株式会社」を設立、翌大正2年(1913)には工場が完成してビール醸造を開始した。この九州に初めて誕生したビールのブランド名が「サクラビール」であった。
- ビール小史** 日本におけるビール醸造の歴史は、大きく分けて横浜と札幌で始まり、横浜で設立されたのが後の「麒麟麦酒株式会社」であり、ブランド名を「キリンビール」として現在に至る。一方、札幌で設立されたのは「札幌麦酒会社」であるが、明治39年(1906)に「日本麦酒株式会社」「大阪麦酒株式会社」と3社合併して「大日本麦酒株式会社」となり、ブランド名を「サッポロビール」「エビスビール」「アサヒビール」とした（神奈川県立歴史博物館2006）。大正3年(1914)に始まった第一次世界大戦は日本に好景気をもたらし、日本製のビールは海外輸出が本格化すると同時に国内消費の拡大が加わり、業界は活況を呈した。そのような中で登場した「サクラビール」は人気を博し、最盛期には国内シェア9%、国内第3位となるほどであった。当時、ビールという洋風な商品を人々にアピールするため、所謂「美人画ポスター」が飲食店や小売店の店頭盛んに掲示されたが、「サクラビール」も多くポスターを印刷した（サッポロビール博物館1998）。現存するものは、約100～80年を経てレトロポスターとして市場流通し人気を博している（写真第24図版）ほか、大正～昭和初期の世相を示す小道具として舞台や映画の背景に登場することもある。創業後の会社の経緯をたどると、昭和4年(1929)に社名を「桜麦酒株式会社」に改称したが、昭和18年(1943)に大日本麦酒株式会社と合併することとなり、それに伴い30年続いた「サクラビール」のブランドは消滅してしまった。
- 瓶製造** 次に、瓶底面の「TGC」の浮き出し文字についてであるが、一般に瓶の底面には製瓶メーカーの略号や記号がつけられることが多い。日本で初めて本格的な国産ビール瓶の製造に成功したのは「有限責任 品川硝子会社」であり、明治22年(1889)のことであった（山本1990）。当時はまだ職人がガラスを吹く方法で瓶が製造され、日本人のほかドイツ人の職工が月産8～9万本の瓶を製造、その多くが「キリンビール」に採用された。しかし、その当時でもビール瓶は輸入ビールの空き瓶(古瓶)と輸入した瓶(新瓶)に頼っていたのが実情であり、特に輸入の新瓶は高価であった。そのような中、明治23年(1890)に設立された「田中硝子会社」は良質な国産

ビール瓶の製造に成功し、輸入の新瓶より安く納入することで明治36年(1903)には月25万本のビール瓶を供給した。やがて田中硝子のつくる日本製のビール瓶は、海外へ輸出されるまでに成功する。田中硝子会社は、明治31年(1899)に改組して「東洋硝子株式会社」と改称し、大日本麦酒株式会社が東京で製造する「エビスビール」と「アサヒビール」が東洋硝子のビール瓶に詰められた。このような経過からすると、「TGC」は東洋硝子株式会社の英語表記の頭文字を使った略号と考えられ、そのビール瓶の供給先が九州の「サクラビール」へも延びていたことが推察される。なお、瓶色の違いについては参考とできる文献に当たることが出来なかったが、当時のビール広告ポスターに描かれる瓶色はすべて茶色であり（サッポロビール博物館 1998）、緑色は少数派だったと思われる。

埋没経過 以上、第107次調査出土のビール瓶は、大正時代に九州初のビールとして誕生した福岡県北九州市門司に工場があった帝国麦酒株式会社（のちに桜麦酒株式会社に社名変更）の「サクラビール」の緑色のビール瓶であることがわかった。それではなぜ、九州から遠く離れた岩手県盛岡市の農村地帯の一画に、このビール瓶が埋没することになったのであろうか。考えられる可能性はいくつかある。ビール瓶に限らず、空き瓶そのものは転用されることが多く、昔の地方の清涼飲料水(地サイダーなど)会社では数多く流通していた当時の「三ツ矢サイダー」瓶に自社ラベルを貼って使用しており、「サクラビール」瓶に形状が同じ大日本麦酒株式会社の「サッポロビール」や「アサヒビール」のラベルが貼られて岩手、盛岡に来た可能性がある。あるいは、九州の「サクラビール」瓶そのもの（もちろん当時はラベル付きであったと思われるが）を珍しいものとして盛岡の自宅に持ってきたが、事情を知らない家人が廃棄してしまった、とも考えられる。この瓶の製造から廃棄までの間に、どのようなストーリーがあったのだろうか。

登録文化財 なお、「サクラビール」が製造されていたレンガ造りの工場施設は、平成12年(2000)までサッポロビール門司工場(九州工場)として稼働していたが、現在は「門司赤煉瓦ブレイス」という集客施設として整備され（国登録有形文化財「旧帝国麦酒門司工場」）、資料館（北九州市門司麦酒煉瓦館）やレストラン、地域交流施設となっている。

復刻ビール また、平成24年3月までの期間限定で「門司港地ビール工房」という地元会社が、サッポロビール株式会社所有の成分表をもとに「サクラビール」を復刻販売し、大正時代のラベルも復刻された。その復刻ラガービールの特徴は、「糖度高く、芳醇なる香味、淡い琥珀色にて色沢鮮麗」だそうである。

【引用・参考文献】

- 麒麟麦酒株式会社 1983『ビールと日本人 明治・大正・昭和ビール普及史』
神奈川県立歴史博物館 2006『日本のビールー横浜発 国民飲料へー』
神原雄一郎 2011「盛岡の地中から発見されたガラス瓶-明治から昭和にかけてのガラス瓶-」平成23年度遺跡の学び館学芸講座「発見された盛岡のまち1」配布資料
サッポロビール博物館 1998『ビールのポスター』
津嶋知弘 2012「大正・昭和初期のビール瓶と美人画ポスターー史跡志波城跡第107次調査区表土出土のビール瓶と関連広告ポスターについてー」盛岡市遺跡の学び館学芸レポート Vol.1（盛岡市ホームページ）
山本孝造 1990『びんの話』日本能率協会